

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23320039

研究課題名(和文) 北海道の草の根文化についてのグローバルな研究

研究課題名(英文) Local research on grass roots cultures in Hokkaido

研究代表者

堀田 真紀子 (Horita, Makiko)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・研究員

研究者番号：90261346

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文化の持つエンパワメント機能に注目し、地元北海道を中心に、小規模農業従事者、障害者、少数民族といった社会的、経済的弱者を主体にしたり、対象にした文化発信を研究。全員がイニシアティブを担える脱中心的な構造を持つものほど、当該者のエンパワメントにつながることを、また地域の立場と、海外の類似事例の担い手との交流や、実践者と研究家の交流が、とくに効果的に働くことを明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This research project focuses on the function of culture in people's empowerment. Based in Hokkaido where the team is located, we conducted research on cultural output for and by social and economic minorities such as small farmers, disabled people and ethnic minorities. It has revealed that a decentralized structure where everybody concerned can take initiative is essential to maximize empowerment. We also found that multilevel interactions such as between practitioners and researchers as well as between actors of local and global levels are especially effective.

研究分野：芸術の社会機能

キーワード：エンパワメント マイノリティ 北方圏 草の根 社会彫刻 パブリック・スペース 生態地域 ストリー

1. 研究開始当初の背景

発端は、現代芸術の領域から、北海道で地域固有の芸術を発信することの難しさについて本研究代表者堀田と職業芸術家であり本研究では研究連携者となる大井が共著論文(注1)で考えたことだった。とくに大井が自身芸術家活動の本拠地とするアメリカ西海岸の現代芸術をとりまく状況を、アートワールド論(注2)に基づいて比較したとき、北海道の状況の問題点として浮き彫りになったのは、1、作品と広範な受容者との間の相互作用を促すために適切な企画を行う仲介者(ギャラリストやキュレーター)が不足していること。2、少なくとも地元の芸術家を扱う批評家や研究者が不足しているために、地元の芸術家が批評という契機をくぐり、自分の制作を相対化して、芸術史や社会といった、広範なコンテキストのなかで自分の制作の意味を位置づけることができないということが明らかになった。日本の文化的土壌や北海道の状況、とくに日常生活に根ざしながらそれを変容させることを旨としてきた明治開国以前の日本の長い芸術受容の伝統を考える時、1について、日本の仲介者は、アメリカのように、受容者の趣味や個性の主張の道具として、あるいは知られざる価値を発掘する目利きとしての功績欲や投機欲をばねにマーケットで作品と受容者を出合わせるアメリカ流の形はとらないだろう。むしろ作品を日常生活の諸状況へより密接に溶け込ませる仲介役を引き受けるべきではないかという結論に達した。美術館やギャラリー以外の市民の日常空間に作品を埋め込む、近年盛んになされるようになった地域ぐるみの現代芸術祭は、その点評価されるものである。それと同時に、筆者堀田は、冒頭部に述べたような、弱体化する地域を文化の力で蘇生する道を探したいという問題意識も並行して抱いており、その観点から芸術祭のこころみを検討する時、二つの点で限界があるように思われた。今、ここにあるものを扱いながら、価値創出する現代芸術は、なるほど今、ここにある地域の現実、とくにその意味づけに対して変革的に働く。が、芸術祭という文脈が、どうしても、「この期間からが芸術です」「ここからが芸術です」という枠づけの力として働くために、受容者の方でも、それを「芸術」という特殊な文脈内での出来事

自分の日常とは関係のない出来事として受け止めがちなこと。この枠が、芸術のもつ変革力が地域へと恒常的に、直に流れ込んでいくことを制限しているように思われた。これが一つ目である。もう一つは、展示されている作品が、もちろん多くの例外もあるが、形態面のみ、あるいは表面的な地域理解に基づくサイトスペシフィティを示すだけで、十分地域の状況に根ざして制作されたように見えないこと。地域を作品を引き立たせる単なる背景とみなしたり、単に作家の意図を一方的に押し付ける作品がいく

らそこにつくられても、地域の状況は混乱しこそすれ、その固有性、意味のまとまりを高めるかたちで変容することはない。その点、芸術祭のように衆目を集めることはなくても、地域に住み、その土地や人々と多面的で密接な相互関係を築きながら恒常的に続けられる草の根的な芸術制作の方が、希望がある。このような問題意識から、2010年度より、学内共同研究補助金「地域発・草の根からの文化発信」(代表者堀田)を獲得、北海道のそのような草の根的な文化実践者を招き聞き取りや映画上映をする芸術と地域についての勉強会を開始した。

そこで草の根文化をめぐる二つの問題が浮き彫りにされたように思う。一つ目は、先ほども指摘した批評の不在による停滞が、草の根文化の実践者にも当てはまること。地域に密着する視点が視野狭さを招きがちで、とくにグローバルな、あるいは社会的、文化的な広い文脈で自分たちの実践の意味を十分自覚しているように見えない。二つ目はそれと関連して、作品の質の評価システムに混乱が見られること。作品そのものの価値のみを評価対象にする従来の批評システムでは、実践者そのものも主に地域のリソースを動員する草の根文化のレベルは当然低いということになる(たとえば素人劇を実践するコンカリーニョ代表は勉強会中、「私たちは芸術をやっているつもりはない」と明言された)。しかし草の根文化においては、作品自体よりも、作品が作られ、発信されるプロセス全体が、地域とその住人が置かれた状況をどのように変容させてきたか、地域の状況全体の変化を射程に入れたアプローチが必要なのではないだろうか。すでにcommunity based art の評価システムについて、アメリカでは従来の芸術批評のほか、犯罪率低下など、作品を通してもたらされたさまざまな社会変化にも目を配る視点を総合する試みがなされている(注3)。草の根文化は、必ずしも具体的な社会問題に焦点をあてているとは限らない点アメリカのcommunity based art と異なるが、それらを参考にしながら、草の根文化の批評・評価システムを早急に整える必要がある。幸い、その大部分がこの共同研究、勉強会のメンバーと重なる本研究計画の構成員は、これまで各国地域文化研究を背景に、マイノリティや文化アイデンティティ、ジェンダー、市民メディアなどを研究対象にしてきた専門家からなるもので、草の根文化の地域状況への変容力を、グローバルな広いコンテキストから多面的、総合的に把握するには適している。そこで、これまで北海道の草の根文化実践者とともにやってきた勉強会を、実践者からの聞き取りに加え、研究者による実践者の分析を含めた相互的なものにバージョンアップするプランが生まれた。

2. 研究の目的

札幌外の北海道地域の過疎化の進行は近年凄まじい。経済の問題であるのと勝るとも劣らず、地域の意味の空洞化に発するこの問題に対して、芸術や文化の研究者として何ができるかと真剣に問うた時、地域への還元を最大化する文化形態として、「草の根文化」という概念構想が生まれた。草の根文化とは、その素材や発信形態が、文化生産者のいる地域のありのままの状況と密接に結びつく文化。ゆえに文化生産・発信がそのまま地域の状況をとらえ直す新たなイメージの生産・共有を促す文化である。草の根文化が生産・蓄積されるごとに、その地域は意味深い固有性の高い場所になり、住人は地域をアイデンティティの拠所にできるようになり、外の人々に対しても、その地域について吸引力あるイメージが発散される。このように地域の状況を変える潜在力を持つものの、まだ萌芽段階にあるこの草の根文化の構造や潜勢力を明らかにすることで、実践者に理論的支柱を与え、自己意識を持った運動体となるのを助け、その振興の一助となる研究方法や研究者の役割はいかなるものかを問う。

3. 研究の方法

準備考察として草の根文化の概念規定と北海道の歴史など背景知識を身に付けた後、現地調査と勉強会という2つの柱からなる事例研究を重ねる。現地調査では、研究分担者の多様な専門を生かし、草の根文化の社会的波及力を総合的にとらえるべく、多方面の関係者に聞き取りをする。その結果作成された報告書をもとに、研究分担者の世界各地にわたる地域研究の背景を生かし、海外の類似事例と比較するなど、草の根文化の地域性をあえてグローバルなコンテキストから捉える研究を展開。研究成果はすべて公表する前に実践者にフィードバックし、感想やコメント、研究のその後の実践に対する影響などをたずねる。その他、研究成果を先鋭化・総合するような芸術制作を実践者に依頼するなど、研究者と実践者の間に観察者と観察対象の役割が反転する機会を多く設けることで、両者の間の創造的な共同作業を促進、研究・実践の両面から草の根文化の内実を明らかにしていく。事例研究を重ねることで明らかになった北海道の文化資源の多様性を総合し、北海道の草の根文化の諸動向をまとめるシンポジウムを開催する。

4. 研究成果

2011年度

4月、浦河町の統合失調症の人々の社会復帰施設、「べてるの家」や、同町の大黒座という93年続いた映画館とそれを支える人々についてドキュメンタリーを撮り続ける映画監督、森田恵子さんをまねいた研究会を行い、障害者の自助努力を引きだし、主体性を重視する草の根文化のアプローチ方法につ

いて示唆的な話をうかがう。

5月、堀田真紀子により、「草の根文化とは何か？」というタイトルで、社会運動と草の根文化を関連づけながら、文化研究が、社会を変革する可能性、知識人の役割について論じた。

7月は、宇佐見森吉により「草の根文化を考える 限界芸術論の視点から」というタイトルで、鶴見俊輔の限界芸術論をふまえ、日常生活に密着したアートの可能性について活発な議論交換をした。

1月には、花崎 皋平、原田公久枝をまねいた「アイヌと和人の未完の物語」。アイヌと和人の関係について、これまでどうであって、これからどうするべきか。花崎さん、原田さんという具体的な人物の体験を踏まえて問題提起。その後の議論がさかんになされた。2月には、大井敏恭、富田俊明、若江漢字をまねき、堀田真紀子が中心になって行った「草の根からの社会変革」というタイトルの2日間にわたる研究会を行い、それぞれ、アートと社会の関連について、持論を展開、集中的に議論を交わした。

2012年度

オーストラリアの日本学研究者、テッサ・モリス・スズキさんとの対話、その後の文通の中で、空知民衆史講座と、東アジア合同ワークショップについて聞いた。北海道の空知管区、深川市の一乗寺という浄土真宗の寺を本拠にした、市民による草の根活動でありながら、東アジアの平和構築のために、専門家や行政ができないレベルで確実な成果を上げ、国際的にも評価されるにいたっている市民団体である。北海道でのダムや発電所、炭坑や道路建設などにおいて、第二次世界大戦下、強制連行された朝鮮人が多数働いていて、過酷な労働条件のもとに命を落とした人も多く、ぞんざいに葬られた遺骨が、場所によっては多数埋められているが、その家族は、そのことを知らないし、場合によっては日本に来ていることすら知らない。そこで、これらの遺骨の消息をつきつめては、丁寧に、名前を持った人として葬り、本国の親族に返しに行くという、礼儀によって過去の私たちの祖先が犯した犯行をあがなおうとするアクションをはじめたグループで、それは反響をよび、議論を巻き起こし、遺骨掘りや遺骨返しは、日本人のほか、韓国人、在日朝鮮人、世界中からの研究者や社会活動家たちがともに参加する大きな運動にふくれあがって行った。研究代表者の堀田と研究分担者の富田俊明、協力者の大井敏恭で、まずは、6月にその総会に参加。一泊二日の参与観察を行った。研究過程をレフレキシングで双方向的なものにするために、その後、7月には、私たちの彼らについての調査、分析について、彼らと、ワークショップ参加者の韓国人の人たち自身に聞いてもらい、ディスカッション

の機会を持った。その後、一週間におよぶ遺骨発掘とシンポジウムに参加した。

秋から冬にかけては、堀田がアメリカで出会った、使われていない建物や土地を占拠してコミュニティのための場所にするスクウォットイングの実践者である、エリック・ライルを紹介。長沼町「こぐま座」では、北海道で自給自足的な生活を試みる移住者たちと、大通りの「OYOYO」では、札幌在住のアート関係者と、北大では、北大のスクウォット研究会の学生や、北大のパブリックスペースでの行動規制に対する反対運動を組織している学生たちと、東京、3331 ARTS CHIYODAでの、アサヒ・アート・カフェでは、アサヒアートフェスティバル(日本最大のコミュニティ・アートのコンクール、ネットワーク)関係者と、相互的、対話的なトークイベントを行った。

2013年度

5月と7月と8月に、富田俊明を中心に、北海道のアーティスト中村絵美と秋元早苗の参加の下沖縄～北海道の地域性にねざすストーリーテリング・プロジェクトを行う。2月には、「初音ミクと宇宙開発の草の根な関係」というタイトルで、北海道大学国際広報メディア観光学院博士課程の渡辺謙仁を中心にした研究会を行う。その成果は報告書『草の根文化の時代 vol. 2』に収録。

3月には、坂巻正美を中心に、網走のオホーツク文化交流センターで、「熊に生(な)る - “野生の思考”を現代社会で再生する方法 [Art]を探る-」というタイトルのシンポジウムを行った。その成果は、やはりレフレキシングで聴衆参加的な成果報告冊子として、2015年度に刊行。

2014年度

北海道の開拓記念碑のなかでも、名もない民衆の姿をモニュメントにした本郷新の『風雪の群像』は、その中にアイヌの長老の姿も入れているもの、群像の他の人物たちが立っているのに対して、唯一切り株に座って考え込むポーズをとっている。このアイヌ表象の是非をめくり、議論が絶えぬ作品でもあり、過激派集団に爆弾で粉砕され、作り直した経緯も持つ。本年度は、科研メンバーの坂巻正美が、本郷新記念札幌彫刻美術館の、Our Place 展で、この作品とそれにまつわる議論をモチーフにした作品を展示したことで連動して、真の草の根文化とは何かという問題をめぐり二つの催しを開催することになった。第1弾は7月11日、「『場所考』私たちの生きる場所に建つ彫刻 “風雪の群像”から」というシンポジウムとして、話者としては、坂巻正美、堀田真紀子を中心に、ゲストとして、北海道史の研究者、谷本晃久、北海道の場所性を踏まえた作品を扱ってきたキュレーターの浅川泰を招いた。車座談義のかたちをとり、参加者からも積極的

な意見がよせられた。第2弾として、9月27日、本郷新記念札幌彫刻美術館で、この作品をめぐる事件とその議論を、当事者として体験してこられた花崎卓平氏をゲストに迎え「和人とアイヌの物語 2」という講演会を開催。アイヌと和人の関係史、とくに、この問題に対するとどんなアプローチ方法が適切かという問題について議論を深めることができた。また3月には、—2013年、網走で行った「熊に生る—野生の思考を現代社会で再生する方法 Art をさぐる」シンポジウムの成果を冊子『熊に生る 網走から Chipasir へ』にまとめた。また、ここ2年の草の根文化研究の成果をまとめた『草の根文化の時代 vol. 2』を刊行。3月26日にはこの内容を踏まえ、ハイデガーの建築論をもとに場所と草の根文化との関連を探求する勉強会を開催した。

016年3月には、草の根文化の時代 VOL.2を刊行。児童虐待からくるトラウマや共依存の問題を抱えながら、草の根文化発信を続けることでこれらを改善、克服したケースなどについて分析

2015年度

8月に行った安積遊歩・宇宙を招いた公開講演会「親子関係から始まる平和」では、障害者の視点が、効率や生産性を優先する社会がはらむ問題性を浮かび上がらせることを確認。そうした社会で周縁化され、差別されてきた彼らの体験が、多様性が共存する非暴力的な社会づくりに寄与できること、それはとくに子育てや子供の教育の現場で効力を発することを明らかにすることができた。

3月に札幌と東京とで行った国際公開シンポジウム「農業とコミュニティ・エンパワメント」では、北海道の基幹産業である農業が、その営まれ方次第では、生態系の破壊や食の安全、地域経済の低迷、高齢化社会、孤立社会といった問題への回答を与えることを明らかにすることができた。

また坂巻正美、富田俊明、大井敏恭、堀田真紀子による小冊子は、草の根文化が現代アートの分野でどのように寄与できるかを示唆するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計16件)

西村龍一、呼びかけと応答 日経カナダ人アーティストシンディ・モチズキのアート・アニメーションにおける「記憶」の意味、国際広報メディア・観光学ジャーナル、査読有、19巻、2014年、3-20

堀田真紀子、草の根文化とは何か? その1、その2、国際広報メディア・観光学ジャーナル、査読有、13巻、2011年、17-45、

玄武岩、コリアン・ネットワークからみるディアスポラの地平、マスコミュニケーション

ン研究、査読有、79 巻、2011 年、27-45

〔学会発表〕(計 7 件)

玄武岩、バイチャゼ・ズヴェトラナ、Influence the Korean Community to the Formation of the Identity of the Japanese Returnees from Sakhalin, Russia and South Korea Historical Aspect and Challenge of Modernity, 2015 年 8 月 31 日、ユジノサハリンスク(ロシア)

堀田真紀子、How Art Helps to Create a Public Space, International Conference of Art in Society, Art and Design Academy, リバプール(英国), 2012 年 7 月 14 日

坂巻正美、けはいをきくこと 北方圏における森の思想、50 回大学美術教育全国大会、宮城教育大学、(宮城県・仙台) 2011 年 9 月 24 日

〔図書〕(計 7 件)

玄武岩、バイチャゼ・ズヴェトラナ、サハリン残留 100 年にわたる家族の物語、2016 年、256

玄武岩、コリアン・ネットワークメディア・移動の歴史と空間、北海道大学出版会、2013 年、482

常田益代(小野有五編)、北海道電力<泊原発>の問題は何か、寿郎社、2012 年

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀田 真紀子 (HORITA Makiko)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・研究員

研究者番号：90261346

(2) 研究分担者

玄 武岩 (HYON Muan)

北海道大学、メディア・コミュニケーション研究院、准教授

研究者番号：80376607

西村 龍一 (NISHIMURA Ryuichi)

北海道大学、メディア・コミュニケーション研究院、教授

研究者番号：10241390

田邊 鉄 (TANABE Tetsu)

北海道大学、情報基盤センター、准教授

研究者番号：30301922

宇佐見 森吉 (USAMI Shinkichi)

北海道大学、メディア・コミュニケーション研究院、教授

研究者番号：20203507

川崎 義和 (KAWASAKI Yoshikazu)

北海道大学、メディア・コミュニケーション研究院、准教授

研究者番号：70214632

坂巻 正美 (SAKAMAKI Masami)

北海道教育大学、教育学部、教授

研究者番号：60292067

富田 俊明 (TOMITA Toshiaki)

北海道教育大学、教育学部、講師

研究者番号：60584208

常田 益代 (TOKITA Masuyo)

北海道大学、国際本部、名誉教授

研究者番号：80291847

(3) 連携研究者

なし